Shot

TOPICS

蝶々夫人を演じるオポライス
© Wilfried Hösl

Opera バイエルン州立歌劇場《蝶々夫人》

1973年のロルフ・ブッセ演出《蝶々夫人》（プッチーニ作曲）を今も愛でている当劇場の観客は、さすが「アルプスの北のイタリア」と称される、保守的なバイエルン地方ならではの趣向だ。裏はボロボロな舞台セットだというが、その古めかしさがまた、日本的情緒を醸し出している。ステファノ・ランツァーニの指揮が、堅苦しいフレージングと遅過ぎるテンポで幕を開けたのは、その古さに感化されたのかと思えたが、歌手をしっかり支えて、自由に歌わせていないのは何故なのか。

ピンカートン役のディミトロ・ポポフは、初めはその指揮に従順に歌っていたが、物語が進むうちに情熱を増していき、この公演を盛り上げた立役者となっていった。題名役のクリスティーヌ・オポライスは、声に負担をかけない範囲内で、体当たりで歌う歌手であるが、「15歳の極東の少女」という役柄に敬意を表してか、全般的に芯のない声で歌い通した。2幕での、下げた黒髪と藍染めのような着物姿も可憐で、視覚的には合格だっただけに、日本人の秘めた情熱を理解していない役作りは残念であった。2曲目のアリアはドラマティックに歌えていたが、プッチーニ独特のフレージングが短く切れ過ぎてしまう。これは同じ作曲家の《マノン・レスコー》でも多少感じられたが、今回のように声に劇的さがない歌唱では尚更目立ってしまう。

最後に特筆すべきは女声合唱の美しい響きだろう。障子が舞台奥にあるという設定で、登場人物達が観客に背を向けたままの舞台をその美しい響きが満たすだけで、聴衆が各々の幻想的な想像力を膨らませられる雄弁な合唱だった。

（中 東生）